御名前を列ねさせられた。上首の方が守護せられる位ぢやでそれにつれて餘の菩薩も諸共に晝夜に守つて下さるのぢや、何故にこの二菩薩が念佛行者を守つて下さるのかと申せばこれには二つの理由がある。先づ一には佛恩を報ずる故ぢや、全體觀音さんは常に彌陀の御恩の厚いことを思召し、頭の寶冠の頂きには彌陀を安置して恩を報ぜられるのぢや、頂上に安置せらるゝのは常に忘れてはならぬの思召ぢや、又勢至菩薩は常に合掌念佛あらせらる。これ本願の名號を稱念して報恩とせらるゝのである。私共も彌陀の御恩を思ふて常に念佛するから共に恩を報ずる仲間であるから常にお守り下さるのである。全體この二菩薩の本を尋ねてみれば彌陀如來の慈悲と智惠から顯はれて居らるゝのぢやから本地の恩

を報じ玉ふのぢや、又佛說本事因緣經から頂いて見ればこの二菩薩は彌陀の子ぢやとある。それは往昔河沙却に一人の大王があつた。其御名を曇摩伽大王と申し其王妃を淨摩尼夫人と申した。其間に二人の王子がましました。早離と束離と申したのぢや、この二人の王子が觀音勢至で、大王と云ふのは釋迦如來、夫人は彌陀如來ぢやとある。斯かる理由があるのでこの二菩薩が彌陀の脇士となつて衆生化益をお助けなされ其御恩を報ぜらるゝのである。これで二菩薩が念佛行者を守つて下さる一つの理由は濟んだ。二つには念佛者は其勝友であるからお守り下さるのぢや、觀音勢至は常々念佛の行者をお譽めなされて芬陀利華ぢやともわが勝れた朋達ぢやとも仰せらるゝ、念佛行者は恐しい結構な友達を持つ

た者ぢや、而し唯一と口に友達と云ふけれ共心の友達と心の友達とがある。形の友達は世間には澤山あるけれ共心の友達は仲々稀なものぢや、東京から横濱へ行く電車の中でも、僅か暫く活動寫眞の映畫を見物して居る間にでも形の友達は出來るけれ共、イザ心の友達となると隨分難つかしいものぢや、世間で互ひに心許した朋友の間を管鮑の交りと申すがあの支那の管仲と鮑叔と云ふやうなのがほんまの心の友達ぢや、苦しいことも樂しいことも共にすると云ふ水も漏らさぬ間ぢや、又徒然草に見ぬ世の人を友とすとあるが、五十年、百年のと時代は違ふても心の友達はある。又仲間ばかりぢやない、敵と味方と別れても心の友達はある。あの西南戰爭の時に西鄕隆盛は一時賊軍となつたけれ共官軍の山縣有

朋とは眞實心の友達であつたのぢや、是から見れば形の友達と心の友達は大違ひ、今觀音勢至が念佛行者を友達ぢやと仰しやるのは形の上の友達ぢやないぞ、心の友達ぢや、其心の友達の觀音勢至の二菩薩が諸邪業繫障らぬやうにと晝夜不斷にお守りづめ、其守つて下さる不思議な理由も己が心に引當てゝ探つて見るでは御座らぬ。斯る手强きお慈悲ぞと頂いたなら稱へる念佛に功を入れず彌陀を賴んで御助けを決定して、其御助けの有難さよと喜ぶ心があるならば念佛申すばかりぢや、臨終捨命の夕べまでは己が煩惱の肉眼に障ぎられて影の形に添ふ如く守つて下さるお相は拜むことは叶はね共、やがて淨土の蓮臺に立ち上りお證りの身となつたならあらん限りが只一と目ぢや、この娑婆に居て守つて下さる

と聞いてさへ嬉しいのに追付浄土へ參りかゝる境涯となつたなら其時の嬉しさは怎のやうにあらうぞと、得奉る佛果圓滿を爰に居乍ら取越して南無阿彌陀佛と喜ぶのぢや、其の行者なら吾身一人ぢやとは思ふなよ、南無阿彌陀佛を稱ふれば觀音勢至はもろ共に恒沙塵數の菩薩と影の如くに身に添へり、廣い天地の間にも仕合せ者は念佛行者ぞと喜ばるゝが有難い。

第二十六席

無碍光佛ノヒカリニハ、無數ノ阿彌陀マシ〳〵テ。
化佛オノ〳〵コトゞク、眞實信心ヲマモルナリ。

ヱー、この和讃は阿彌陀佛が無量の光明を放ち玉ふ、其光明の中に無量無數の化佛まし〳〵て本佛と共に念佛の行者を守つて下

さると云ふことを明して下された御和讃ぢや、或人はこれは化佛のみのお守りぢやと申すけれども、十九二十の機類なら定散自力の非本願ぢやで化佛ぢやけれ共、十八願は本願の正機故に、本佛が既にお守り下さる、上は化佛も共に守つて下さる、化佛と申すは彌陀の光明の中より出らるゝ分身ぢや、初地の菩薩でさへ百佛世界に分身して化益せらるゝとある。況や阿彌陀様なら無數に分身せられそれが悉く念佛行者を守護して下さるのぢや。

時は昭和九年の八月の某夜、大阪の或運轉手が空の自動車を操り乍ら大津街道を流して居ると路傍から二十二三の美しい令孃が現はれ神戸の元町何丁目某家まで乗せて貰ひたい、車賃何程と定めた上、特に言葉に力を入れて京都の大學病院を通つて呉れとの

注文、運轉手は早速承知して夜の事ではあり障害物も少いので超スピートで大學病院の前を通り拔け阪神街道を走り續けて注文通り神戸の某宅へ車を着けた、屋敷構へも結構な家で門構へに高塀附き、やがて令嬢は門内へ消へて了ふた、車賃を取りに入つたこゝ運轉手は門側に待つて居るが、半時間經つても四十分過ぎても令嬢も姿を見せず、車賃とも云はれぬので怪しいことゝ運轉手は屋敷内へ入り込み、玄關先で車賃を請求すると何やら家内は隨分騒いで居る様子ちや、出て來た家人に聞くと宵の中から自動車で來る様な家人もなく、來客もなしそれは大方家違ひであらうとの劔もホロ、の挨拶、運轉手益々合點が行かず其客は斯く〳〵の様子の令嬢で、殊に京都の大學病院の前を通れとの注文で、確か

にお見受けする所御當家の令嬢と存じますと述べると、其姿に似た年頃の娘はありますけれ共それは昨日京都の大學病院で死にまして、只今近親の者が寄り集り通夜して居るこの事で運轉手は益々合點行かず、それでは一度念の爲めに其死骸を見せて頂きますと家人の許しを得て死骸を實檢してみると運轉手は俄かに顏色變じ眞ッ青となり、ブル〳〵ふるひ出した。私が大津から乘せて來ましたのは確かにこの令嬢に間違ひは御座りませぬと息も切れ切れに述べたので、初めて家人も氣が付き出した。娘が病院に入院中お母さん今度私が全快しましたら自動車で阪神街道を遠乘りしてみますと、熱心に語つて居つたが、其言や殊に大學病院前を通つて呉れと注文したのは死んで其望みを遂げたので御座らう。車

質はお拂ひしますと、其上何程かの祝儀まで貰ふて運轉手は歸つたが、この運轉手はそれから病氣を起し、遂に死んで了ふたと新聞に報じてあつた。

斯かる事實は今日の心理學では一寸解釋も面倒ぢやが、事實とすれば致方はない、凡夫の迷情てさへ分身が出來る。況や阿彌陀如來なら、種々に形を分けて無數の化佛となり隨類應同の化益を施して下さることは申すまでもないこと、のみならず念佛の行者となつたなら本師の誓願を稱念する故に大切に思召し晝夜不斷に守つて下され、やがては弘誓の船に乗せられて極樂淨土へ乗り込むのぢや。

第二十七席

南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、十方無量ノ諸佛ハ。百重千重圍繞シテ、ヨロコビマモリタマフナリ。

始めありて終りなきは君子の恥づる所、ヱ、一週間の御約束も愈々の一席でお別れで御座る。この和讃は正しく諸佛護念の利益を明して下さる思召、一切の諸佛は第十七願に應へて念佛を讃嘆なされ、其上阿彌陀經の證誠護念のお約束に依つて念佛の行者をお守り下さるのぢや、この守り玉ふにも理由がある。諸佛方と申せば彌陀とは別の佛のやうに聞へるけれ共、其實を申せば無量の諸佛は極樂界中より攝化隨緣の爲めに、或は大日となり多寶となり、或は藥師となり寶性となりて出現せらるゝのぢや、又三世諸佛依念彌陀三昧とあれば一切の諸佛は皆彌陀に依つて成佛し玉ふ

故に今念佛すれば我所證の道理等しき故にお守り下さるのも道理ぢや。

さて此に喜び守り玉ふとあるが字眼ぢや、一と口に守ると云ふけれ共、其中では職務の爲めに守る、義務の爲めに守る、利欲の爲めに守るなど色々ある。警官が人民を保護し守護するのは其職分の爲めぢや、青年團が夜警に出掛けるのは義務の爲めぢや、商人が品物を守り百姓が田畑を守るのは利欲の爲めぢや、菊造りの人が宛然一人子を勞はる樣に菊を大切に守るのは嗜好の守りぢや今諸佛方が念佛行者を守らせらるゝは職務の爲めか、義務の爲めか、利欲か嗜好かと云へば何れも當らぬ。すれば何の爲めぢやと云ふに、今日の吾等胸の中は惜しや欲しやの惡業煩惱の身の上ぢ

やけれ共、宿善開發して得難い信心を得て念佛申す身になつた故諸佛方は、病身な一人息子が全快したやうに喜んで守つて下さるのぢや、可愛い一人息子が今九死一生と云ふやうな大病にかゝつたら親の心配はどれ程であらう。それが藥が的中し次第々々に快方に赴いたら初めの悲しさに引換へて喜び〳〵親は看護するであらう。今諸佛方も今日の吾等を御覽なさるゝに地獄一定と決まつた徒ら者、大悲のお胸を苦しめ申したに、俄かに六字の藥が的中して淨土參りに全快し、參り下向の達者な身になつたのを喜び喜び守り玉ふをば百重千重圍繞して喜び守り玉ふと仰しやつたのである。

時に守ると云ふは熟字に當てゝ見ると守護と續く文字で、守の

字の守りは權威々勢で守ると云ふ文字の意ぢや、滿洲の守備隊と云ふ時の守のぢや、日本の守備隊と聞いたゞけでも匪賊は皇威に恐れる、斯う云ふ時の守りが守の意、又護の字の守りは親が子供を育てるやうな心持で懷ろに抱きかゝへて兩の手を掛けて確乎と抱き占めて居る心持ぢや、すれば上の梵天帝釋、四天王等の類は守の字の守り威勢を以て守つて下さる故惡鬼邪神は近寄ることは叶はぬ。又觀音勢至以下のお守りは守の字の心で親が子を育てるやうにお慈悲ばかりで守つて下さるのぢや。

時に百重千重圍繞してことは如何にも仰山な圍み方ぢや、昔から十重二十重と云ふけれど今それ所ではない、大勢の諸佛方のお守り故に百重千重と御意なされたのぢや、彼の市川家十八番の勸進

帳を見れば、九郎判官義經が兄頼朝の不興を蒙り廣い天下に今は身の置き所なく、奥州へ落ちて行く其同伴十七人、悉く出羽國羽黑山へ登る山伏の姿となり諸方の關所は胡麻化して通つて來たが扨も北陸道の加賀國、安宅の關所に富樫介が張番し、義經の顔を見るなり、さて〳〵能く似た面相なり、滅多に通してはまかりならぬと十七人の同伴は一時に足止め、其時義經は泣いて詫言するけれ共仲々許されぬ。大勢の警固の武士は十重二十重と取圍む。其時辨慶は草鞋の足で其主の義經の面を蹴るやら、さては金剛杖で打ち倒す。其時御恩受けたわが主にこの振舞をする辨慶の胸の内は怎のやうにあつたであらう。而しこの狂言がうま〳〵當つて義經主從は難義な安宅の關所を無事に通ることが出來たのぢや、

今吾々も悪業煩悩に圍まれた身を、利劔の名號で、見事煩悩の圍みは打ち破れ、諸佛菩薩、百重千重圍繞して、取巻かるゝ身となれば、如何な煩悩の怨敵も、今は寄り付くことならず、この度と云ふこの度は、拙い腐れ根性、淺間敷い身の上ではあるけれど、如來のお慈悲に助けられ、神や菩薩の守りを受け、目出度淨土のお證りをば、開く私の身の上ちやと存ぜられたら、あら有難やと思ひ出し語り出しては稱名相續せらるゝが肝要、先づ。

現世利益和讃說教了

昭和十一年六月二十日印刷
昭和十一年六月廿五日發行

定價五拾錢

不許複製

編輯者　大富秀賢
發行者　京都市花屋町通西洞院西入　永田宗太郎
印刷者　京都市猪熊通九條下ル川原城町　小野原三郎

發行所　京都市下京區花屋町通西洞院西入
永田文昌堂
電話下(5)六六五一
振替大阪三〇七八〇

大富秀賢著

□□ **親鸞聖人御一代記**　定價五拾錢　送料八錢

本書は親鸞聖人御一代紙衣の九十年の御教化が如何に辛酸を嘗められたか、然にて止まぬ信仰や其御生誕より御往生迄の御芳蹟、一讀聖人の面影眼前に髣髴す。著者今や圓熟せる筆致と犀利なる史眼を以て最も通俗に最も正確に平易明快なる現代文を以て聖人の全生涯を描寫し、(在來の傳記は專門に傾かずば古文故讀みづらし)且つ一章毎に雅趣ある四幅の繪傳御繪を挿入して懇切に解釋を下す爲に一目瞭然聖人の芳蹟を窺ふに容易ならしむると共に、一面四幅の御繪傳のわけが分る。(故に一代記であり四幅の御繪傳の解釋本である)されば修養の好件侶に法味愛樂の助緣に家庭の讀物に適す。僧俗共に是非一本を備へて宗祖の遺德を讃嘆し法義相續の助緣とされんことを。

□□ **蓮如上人一代記聞書**　定價八拾錢　送料六錢

本書は御公達や御弟子方や同行衆などに對せられて御物語遊ばされた御言葉を集めたもので云はゞ蓮如上人御一代の間の言行で三百十六ケ條あり信徒の讀まねばならぬ本である。

大富秀賢著

□□ **わかりやすい四十八願の話**　定價五拾錢　送料六錢

大無量壽經の樞要、淨土三部經の眼目なる法藏菩薩の誓願を說き顯はしたものが本書である。即ち法藏菩薩が無上正覺の念を起し、最勝淨土建設の心願を發表されたものが表題の四十八願として現はれてゐるのである。著者の味讀すべき筆致は本書の述作に當つても極めて平易明快であり第一願の無三惡趣之願から第十一の必至滅度之願、第十二光明無量之願第十三壽命無量之願、第十七諸佛稱名之願に續いて第十八念佛往生之願に至るところ一讀再讀佛陀大悲の有難さに感泣禁じ得ざるものである。かくて著者はこれらの四十八願を一願二願と順を追ふて一々本文、直譯意譯梗概を揭げて極めて分り易く說明してあるだから青年でも婦人でも老人でも一讀了解のゆく樣に書かれた絕好の書である

大行寺信曉著

□□ **正信偈講話**　定價四拾錢　送料四錢

本書は有名な大行寺師が何人にも分りやすきやう通俗平易に正信偈とは何ぞやより一句々々夫々解說し師が獨特の妙筆を以て一讀の下に正信偈の深意を文々句々委しく解せられ得る良書なり。

輔教 藤岡了觀著

□ □ 一河白道之說教

定價參拾錢
送料四錢

空中の鳥は空氣の輕さを知らず水中の魚は水の性質を知らず人は、赤人生の何たるかを知らずして生死界に迷ひ長くとも百年迄の一生を醉生夢死して、元の三惡道へ墮せんとするを憐みたまひ善導大師は大心海より化現して此の二河白道の喩をもつて未來永遠の樂果と現世安住の生活を得さすべく殘されたるを今平易に信仰を求むる諸兄姉に活路を開けしむべく十席の說教として世に出せし者にして特に附錄として熱心なる求法の士の質問多數と今庄松同行と呼ばれし德太郎翁の師に寄せられたる法の便りと隨筆の如き又得がたき白道の歩む者の好伴侶なりと信ず。師は布敎使として二十有餘年間臺灣に琉球に或ひは軍隊布敎に盡瘁され、夏安生番敎化に又警察署講話に、十餘回最優秀賞を受けられし著名の山本大法要には御示談所主任に或は總會所說敎に從事され、居には師なり。

輔教 藤岡了觀師指導（極彩色版）

□ □ 改訂新版 二河白道御繪

定價 貳拾錢
紙表裝付 送料四錢
上等表裝付 六拾五錢 送料拾四錢
貳圓 送料拾四錢

右の繪は石版十度刷極彩色（長さ三尺六寸巾一尺三寸）密畫にして眞宗として從來の誤れる點多きを大改正を加へて世に出せし最新版にして此繪をかけ二河白道十席の說敎を拜讀せば忽ちにして自己の眞價と如來の救濟を仰ぎ淸き美しき白道の生活をなし以て非常時の國民として皇恩の萬分の一に酬報されたし

終

永田文昌堂版